

金子健二

東京帝大

一聴講生の日記

東京帝大一聴講生の日記

明治36年4月20日（月）

本日より夏目氏の授業あり。小泉師「ラフカディオ・ハーン」を見て夏目氏を比較せんとするは無理なり夏目氏如何に秀才なりと云えどもその趣味の点將^はた想の点に於て到底小泉師の相手たるに価せず。小泉師をすててロイド、夏目、上田「敏」の三氏を入れし井上学長の愚や寧ろ憫察^{びんさつ}すべきなり。

明治36年4月23日（木）

夏目講師本日よりサイラス・マーナーを生徒に訳せしむ。通読の上アクセントを正し難句を問うに過ぎず。つまらぬ授業と言う可し^べ。

明治36年4月28日（火）

夏目氏のサイラス・マーナーに出席す。アクセントを直すは先生の得意なり。蓋し^{けだ}自ら得たる所あればなるべし。（中略）一時より再び昇校す。夏目氏の「文学概論の」講義は実にアンビギヤスにて筆記し難し。

明治36年5月5日（火）

式時より昇校す 夏目氏のレクチュア余り称すべきものにあらず 語尾を吞むくせありて筆記し難し 森氏そのまねをなし衆を笑わす。

明治36年5月25日（月）

一時より三時迄夏目氏の文学概論に出席す 休みなく引続けらるるには閉口す。講義中三年生の秀才石川林四郎氏、先生の誤解せる点を上げて質問す 氏はなかなか

博覧なり 講義終しまいにうやむやにもみ消す 能よき気味な
りき。

明治36年5月28日（木）

夏目氏学生の下しらべなきを推し不機嫌なりき。試験には一種風變りのことをなし来学年より執らんとする英文科授業方針の参考に資せんとす。英文科を文学的になすと語学養成的となすとは試験問題の答案を参考として一決すとの意なり。深慮は可なれ 英文科の目的は今更言うの必要なきにあらずや。

明治36年6月11日（木）

午前拾時より貳時間の予定にて夏目氏の英訳試験あり
 問題実に突飛とつぴにて復習せし者は馬鹿げたる目に会えり
 曰くサイラス・マーナーの梗概と之が批評を英文にて記せと。問題は大人気なれ共かかる大なるものは論文として出さしむる方却かえつて可なるべきに。

明治36年6月15日（月）

午前九時迄に夏目氏の文学概論通読す

午後一時より

夏目氏の試験あり 問題は又候またぞろ突飛のものなり 曰く四月以来口述せしものの大要を述べ合せて之が批評を試みよと。三時に至るも答案を出いだすもの至て稀なり 予は書くことに飽きたるを以て早く出だす。

明治36年9月29日（火）

夏目氏のマクベスに出席す 出席者廿番教室に充溢す 前学年に比して一大変化を来せり。

明治36年10月1日（木）

拾時より拾二時まで夏目氏のマクベス講義をきく。前学年に比して出席者多し 先生快感胸に溢るるものあらん。

明治36年10月8日（木）

拾時より十二時まで夏目氏のマクベス講義に出席す。講師詳しく解註を下し毫も疑念をはさむべき所なけれどもただそのきざなる所あるは予の感心せざる点なり。

明治36年10月13日（火）

マクベス講義および及文学概論講義に出席す 夏目氏は自らも博学を以て任ぜる如く吾人も亦またその深遠なる読書眼を歎称せざるを得ず ただその欠点を上ぐればきざなる所ありて相手の者に厭や味を起さしむることなり。なかなか一すじ縄にてはくえぬしろものなり。

明治36年10月27日（火）

午前夏目氏のマクベス講義及英文学概論に出席す マクベスの時間に夏目氏面白き端書はがきを読み聞かす そは六

道の辻にてシエクスピーア出だす夏目様へと表記せしものにて文面実に抱腹絶倒の文字に富み滑稽の字を籍りて教師を諷戒する所あるものに似たり 恐らくは哲学科の学生ならん前にフロレンツ宛の端書現われ今又夏目氏宛の端書現わる奇と云うべし。

明治36年12月1日（火）

九時昇校し拾時迄夏目講師の講義を聞く。二人の西洋婦人参観に来る。夏目氏の「マクベス中に現われし幽霊に関する議論評講」は何人なんびとも言わんとする所にて毫も注

意に価すべきものなし 氏の長所決して此^かる点にあら
ず。

明治36年12月7日（月）

拾二時迄夏目氏の文学概論を聞く 例証の広きをただ
称すべきのみ 他は陳套のことのみなり。

明治36年12月17日（木）

午前拾時夏目講師のマクベス講義に出席し拾弐時に帰
える。講義中暗^{あん}に当時のハイカラ文学者を冷評するの語

気ありき 夏目講師得意の筆鋒なり。

明治37年1月18日（月）

夏目講師の講義はこの学期より新らたまるとのことなりしを以て心何となく勇みて出席せしに又昨年と大差なき講義を見るに至れり。曰く文学の材料を詳しく論究せんと……此かかる問題は趣味深きものにはあれど夏目氏の如き人には不可能の事にあらざるか（昨年は失敗に帰せしにも関らず）予は寧ろ大塚教授の美学に於てこの講義を聞かんと欲する者なり。ただ夏目氏に於て敬服すべ

きは多読の一点にあるのみ。

明治37年2月23日（火）

午前九時より十一時迄夏目講師の時間に出席す キング・リーヤの講義はマクベスに於けるが如く成功するならん 何となれば出席者の数は以前よりも却かえつて増加したればなり。面白味を与うる点に於てシエキスピーアは千古独歩の勢を有す 故に此かかる大天才の作を真面目に講義するは徒いたずらに新しきをのみ求むるよりは学生のため利益なることならん。予はこの点に於てロイド博士、夏

目講師の勞に謝せんとする者なり（中略）兎に角く實力を養わんとする上に於て夏目、ロイドの二氏がとれる方法やや稍々やや當を得たるに近し。

明治37年4月22日（金）

上田敏氏（中略）の講義に出席する者は以前よりきわだちて減じぬ 是に反して夏目講師の沙翁講義は常に聴講者多く初めより廿番の大教室に充満していささかも減ぜず（姉崎氏の神秘主義講義と好一對）之を見るにつけても人は實力のあらんことを欲せざる可らず。

明治37年6月15日（水）

夏目講師の文学内容論試問あり。問題は六問なりしが自己の講義せしもの僅か二問ありしのみ。而も之しかすら習いしものをその儘に記すべからずとの注文なりき。他の四問は何れも批評にて漠然たる問いというべし。

明治37年10月13日（木）

夏目氏の文学論講義に出席す。文学論は講師赴任以来つづける講義にして予は最初より聞ける一人なり。その

内容を言えばさしたる特色なけれども例の多きには驚歎せざるを得ず。こは講師の多読なるに依るものならん。

明治37年12月1日（木）

九時より十一時迄夏日講師の文学論講義に出席す。英文二年の手の不具なる一学生時間中に懐手して他の書物を見たりとて講師の怒を受け反論する事はげしかりき。こは講師が本学生の手なきを知らずして常に懐手しつつあるものと誤解せしに由る。

明治38年1月17日（火）

ハムレット講義の折に夏目講師の談わき道に走り学長、校長などを望む者は多くの場合に於て利害をのみ打算する人にと公言す。一理ある事なり。当時「文科大学々生の生活」読売紙上にある折とて衆皆な耳を傾く。

明治38年1月23日（月）

午前十時より夏目講師のハムレット講義に出席す。昨年に比すれば時間割上の都合にて聴講者の数三分の一ほど減ぜし様子なれどなお盛況を呈しつつあり。二、三日

以前よりこの講師と上田敏氏との比較論読売紙上に載せられて面白し　言うまでもなく敏氏の遠く及ばざるは何なん人も認むる所なれどその人格の上までけなさるるに至りては寧ろ気の毒の感に堪えず。名誉心に汲々たる敏氏の胸中や如何いかん又之これと同時に非常の賛辞をうけし夏目講師の感や如何　聞かまほしきはこの間の消息にこそ。

明治38年2月14日（火）

文学論講義に出席す　悲劇も喜劇もそのコントラスト使用の点に於て一致すとの説は聞くべき価値あり。悲劇

は喜劇となり得る要素を有し喜劇は悲劇となり得る傾向を具有すとの謂いなり。要するに夏日講師の口吻すこぶは頗る世の所謂学者批評家と異り一種の特質を有するは注目すべき事なり。

明治38年2月16日（木）

夏日講師の文学論講義に出席す。講義終りける後読書の注意をなして曰く 如何に多くの書を読むも己の心先ず定まらざれば何の益もなき事なり、特に文学を味わんと欲する者はこの点に心をとめざる時は底ぬけとなり終

るべし、世には多くの書を読みたりとて誇れるものあれ
 ど何が故に誇るものなるや予には毫もわからず、大学の
 図書館に一生涯もぐり込みて書を読みたりとて到底読み
 つくすべきにもあらず……又世には読むこと多くして然^し
 かも読書のために影響^{すべ}をうけざる者多し是等^{これら}は何のため
 に読書せしなるか頗^{すべ}る怪しきものなり 従てかかる徒
 の多読を誇るは愚の極みと言うべし云々……平凡の様な
 れど聞くべき値あり。

明治38年3月9日（木）

文学論に出席す。夏目講師の写実主義（平凡なる事を材料とする意）は従来の論者と多少見解を異にして聞くべき点多し。

明治38年4月18日（火）

午前九時より夏目講師のハムレット講義、文学論講義に出席す。文学は現今の評家が言える如く千古不変のものにあらず又普遍的（ユニバーサル）のものにもあらず只科学に比して比較的不変のものに過ぎずとの議論がこ

の講師の持論なり。全面的に賛成すべき説にはあらざれど文学を徹頭徹尾難有ありがたがりて好都合なる定義を下す者に比すれば頗る敬服すべき名論なりと思うなり。

明治38年4月20日（木）

午前九時より夏目講師の文学論に出席す。今日より講義の題目改まり文学的要素の一たるコグニチーブ・エレメントの各時代各個人に由て異なることを述べらる。観察点の奇警なるはこの講師の特色なり。来六月迄にこの講義を完結する予定なりと言えは余等は最も幸福の位置に

立てりと言わざるべからず（三年引続いて同一の問題にて研究せられしを以てなり）。

明治38年5月16日（火）

午前九時より拾一時迄夏目講師の講義に出席す。講義の折 談たまたま批評家の上に及ぶや熱心にその持論を述べて曰く 今日の評家は見識頗る狭く度量余りに小なり、例えば彼等の或者は他人の小説を評して曰く かかる作中のカラクターは實際の世の中にあり得べからず故に不自然なりと 安んぞ知らんや文学的作品は定木いづく
じょうぎ

に由て常に律すべきものにあらざるを、又或者は曰くか
 かる主人公はかかる境遇に会うてかかるカラクターに変
 ずべき理ことわりなし故にこの作は實際を穿うがてるものにあらず
 従て見るべき価値なしと安んぞ知らんや人間界の事は評
 家の言える如く一つの鑄型にのみ入るる能あたわざるを、謂おも
 うに文学者の活動すべき位置、材料拾集の田地はこの評
 家の言えるが如き狭きものにあらず 否極めて広き極め
 て自由なる天地を有す、人事もと複雑 評家の以て不自
 然となす所必ずしも文学的材料とならざるに非ず、現今
 の評家は狭き自己の經驗的智識を以て宏大無限の文学的

要素を律せんと 抑も抑も過あやまれるの 甚はなはだしと言いうべし
云々。この言余りに極端に流るれども又一面の真理を穿
てり。

明治38年6月6日（火）

午前九時より夏目講師の講義に出席す。ハムレットの
講義は面白く読まれたり。惜むらくはなお四ページを
残して本年度の授業を終らんとするを。

（金子三郎編 『記録東京帝大一学生の聴講ノート』
私家版、リーブ企画、平成十四年三月所収）

日本文学電子図書館

東京帝大一聴講生の日記

著 者：金子健二

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館